

参考資料2

- ・山村再生担い手づくり事例集について
- ・矢作川流域圏森づくりガイドラインについて
- ・矢作川流域圏木づかいガイドラインについて

・山村再生担い手づくり事例集について

山村再生担い手づくり事例集 取材先と取材者のマッチング表

取材先	取材者
根羽村森林組合、ねば杉っこ餅、根羽村猟友会	* 洲崎燈子、高橋伸夫
恵南森林組合、NPO法人東濃・森林づくりの会、 <u>NPO法人福寿の里自然倶楽部</u>	* 近藤朗、蔵治光一郎、安藤里恵
NPO法人奥矢作森林塾、 <u>株式会社M-easy</u> 、旭木の駅プロジェクト	* 浜口美穂、眞木宏哉
とよた森林学校+OB会、とよた都市農山村交流ネットワーク、おむすび通貨	* 沖章枝、長澤壮平、松井賢子
矢作川水系森林ボランティア協議会、green maman、 <u>農業法人みどりの里</u>	* 蜂須賀功、後藤伸也
豊森なりわい塾、千年持続学校	* 丹羽健司
NPO法人中部猟踊会・三州マタギ屋、岡崎森林組合、おおだの森保護事業者会、じさんじよの会	* 井上祥一郎、西原 均
	*はチームリーダー

※赤線の取材結果について次頁に紹介。

矢作川流域山村再生担い手事例集 調査報告ノート

調査団体名	NPO法人 福寿の里自然倶楽部	団体代表者名	渡会三治
設立年	2011(平成23)年4月	対応してくれた人の名前	渡会三治・横光八洲男
団体URL	http://fukujyu-no-sato.com/		
活動拠点	恵那市上矢作町	調査員	近藤朗・浜口美穂・安藤里恵
取材日	平成25(2013)年11月8日	レポート作成者	安藤里恵
<p><活動内容></p> <p>・過疎化と高齢化が進む上矢作町に少しでも活気を取り戻したいということで、NPO法人福寿の里自然倶楽部を立ち上げた。信号もコンビニもない町だけど、約10haの「アライダシ原生林」(正式名称:アライダシ自然観察教育林)をはじめ手つかずの自然だけはどこにも負けない。北の南限と南の北限の自然が融合した地域にあるアライダシ原生林は、他に類を見ない珍しい植生が見られる。壺峰大船山、その山腹にある大船神社はかつて信仰の山として村人の永遠の心のふるさとである。境内には樹齢2500年とも言われる巨樹の弁慶杉がある。標高1000mの大船牧場には、岐阜県唯一の風力発電があり360度のパノラマが楽しめる。これらを巡るエコツアーを実施している。</p> <p>・12月には間伐体験(人工林ヒノキ・杉)も行なっている。</p>			
<p><会のモットー(何を大切にしているか)></p> <p>・上矢作や原生林を訪れた人々に心安らぐ感動を提供したい。取り組みを通して上矢作の自然のすばらしさを少しでも知って頂けたらいいと思う。「また来たいな」という思いが生まれれば最高である。</p> <p>・信号もコンビニもないが、手つかずの自然だけはあり、どこにも負けない誇りを持っている。</p>			
<p><設立から現在に至るまでに変化したこと></p> <p>・設立から3年目になるが、多くの人たちが上矢作町を訪れてくれて、自然と触れ合う中で自然の素晴らしさや大切さなどを感じていただいていることが一番うれしい。恵那市にこんな素晴らしい自然があるのかとみなさんびっくりして帰られる。だんだん知名度が広がってきたなと感じている。</p>			
<p><連携している団体・専門家・自治体など></p> <p>・恵那市役所ふるさと活力推進室、観光交流室、農業振興課、岐阜県恵那市農林事務所農業振興課、恵那市観光協会、上矢作まちづくり委員会、恵那市観光協会上矢作支部、上矢作道の駅ラフォーレ福寿の里、上矢作農産物加工所ふくちゃん工房、上矢作石川トマト農園</p>			
<p><山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動>例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然体験活動プログラムを展開(エコツーリズム事業) ・町内観光地周辺環境保全事業 ・間伐体験 			

<p><現在直面している課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・NPOを設立して3年目。手付かずの自然資源を案内するエコツーリズム事業(COOP岐阜が全面協力)を展開してきて、着実にツアー参加者は増加している(H23 152名、H24 315名、H25 341名)が、まだまだ、プログラムの内容が一面的であったり、参加者の地域が岐阜県内外・美濃市など固定的である。地元の中学生は学校で来るが、それ以外に地元のひとは訪れない。大きな広がりにはなっていない。広報、宣伝不足の感は否めない。
<p><今後やってみたいこと></p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿泊をセットにした自然体験プログラムを取り入れたい。 ・矢作川流域圏の上流と下流での交流を行ないたい。 ・愛知県三河地方の人々が参加できるような体制を作りたい。 ・大学生を連れてきて教育体験プログラムを行ないたい。 ・いろいろな団体とコラボできるツアーを組みたい。
<p><そのためにはどんな情報・人脈が必要か></p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報＝三河地方の山村体験に関心のある団体 ・人脈＝専門的及び教育的視点で中山間地域の地域づくりに対し協働でと取り組める産学関係者 ・矢作川流域「圏」での交流をどんどん広げていけたらいい。
<p><チームオリジナルの質問></p> <p>質問内容: ツアーガイドが伝えたいことは?</p> <p>答え: 原生林を通して、人の営みを伝えたい。何を学ぶか、何を知るか、知ったことをどう生かすかを重要視している。ただのガイドではなく、インタープリターとしての立場の確立が必要である。</p>
<p><その他、伝えたいこと></p> <p>・略歴</p> <p>H6 恵那郡上矢作町と東濃森林組合の管理者が原生林を残す方向で動き出す。</p> <p>H16 まちづくり委員会が運営を行なう</p> <p>H23 NPO発足法人 福寿の里 自然倶楽部が発足する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エコツーリズム日程・・・5月10日前後～11月後半まで ・以前は幡豆郡吉良町(現 西尾市)と上矢作町で交流があったが、合併により地域の特色が失われてしまった。 ・上矢作町の高齢化率は現在40%、担い手は高齢化し、若者は都会や近隣の恵那市などに出て行ってしまう。 ・町内にある国民健康保険上矢作病院や老人ホーム福寿苑には、外から働きに来る人しかいない。 <ul style="list-style-type: none"> ・豊田市や岡崎市など流域圏の子どもたちと交流をしたいという思いがとてもあった。まずは事例集づくりのメンバー全員で視察と交流をかねて、アライダシ原生林トレッキングツアーを5月に実施してみてもどうか。

矢作川流域山村再生担い手事例集 調査報告ノート

調査団体名	M-easy	団体代表者名	戸田友介 代表取締役社長
設立年	2003年	対応してくれた人の名前	戸田友介 代表取締役社長
団体URL	http://www.m-easy.co.jp/		
活動拠点	豊田市太田町蟹田6番地 福	調査員	眞木宏哉、浜口美穂
取材日	2009年11月26日	レポート作成者	浜口美穂
<p><活動内容></p> <p>当時名古屋大学の学生を中心に同社を設立。2006年から常滑で有機無農薬野菜の生産を始めた。縁あって地域のおばちゃんたちの自家用野菜と一緒に名古屋市内を中心にひき売りを行うようになり、2008年に「やさい安心くらぶ」を立ち上げた。これらの事業は今年10月末に同社から独立。</p> <p>2009年9月～2011年3月末まで、豊田市旧旭町で「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」を豊田市、東京大学と連携して実施。10名の若者が旭地区に移り住み、安心安全な農業を中心に山里の暮らしを体験。様々な価値観の相違などの困難を経て、山里の豊かな自然環境、豊かな人間関係、豊かな暮らしなど「ここには価値あるものがあって、それを表現することが、自分たちの暮らしにつながる」ことに気づいた。結果、7人が独立して移住。現在は、時につながらりながら、福蔵寺の境内でご縁市を開いたり、米や大豆や餅や綿をみんなでつくる「まるっこくらぶ～みんなでつくってみんなでわける野良仕事～」などを実施している。また、都市の人・団体などを受け入れ、山里の体験を提供する講座も実施。今年3月には「生きるを考える講座」を行った。</p>			
<p><会のモットー(何を大切にしているか)></p> <p>地域で生きていくこと。</p>			
<p><設立から現在に至るまでに変化したこと></p> <p>当初はどう稼ぐかということばかり考えていたが、スタッフや地域のじいちゃん・ばあちゃんから、どう暮らしていくかということが一番大切なんだと学んだ。</p> <p>その後、田舎と街をつなげる中間の役割を担うことを考えて実行しようとしたが、地域のことができないことに気づいた。街に4分の1くらいいるパートナーが必要。同社のスタッフを増やすのではなく、その時々でつながりながら一緒にやれるパートナーをつくっていききたい。田舎体験の企画のときには、地域の人に手伝ってもらうこともある。人生のステージにあわせながら、必要とされる役割を担っていこうと思うようになった。</p>			
<p><連携している団体・専門家・自治体など></p> <p>旭地区の様々な地縁組織や団体、豊田市の様々なまちづくり団体、旭木の駅実行委員会(事務局)、とよた都市農山村交流ネットワーク(監事)、東京大学 牧野篤教授、名古屋大学 高野雅夫准教授、NPO法人樹木環境ネットワーク協会 洪澤寿一氏など多数。</p>			
<p><山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動>例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など</p> <p>(同社と個人の動きは明確に分けていないことを前提に)</p> <p>今年4月に、豊田市の地域会議制度を利用し「あさひ若者会」を結成(事務局は旭支所)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●背景:お年寄りと若者の間には気持ちの隔たりや遠慮があるが、若者を巻き込んでいかなないと地域づくりはできない。若者も地域のことを真剣に考え、何かやりたいと思っている。 ●具体的取り組み:洪澤寿一氏を招いて講演会、年配者を案内人に村歩き、ワークショップ(何十年か後の旭がどうなっているか、何がしたいかを出し合う)など。 ●戸田さんの感想:地域の若者たちは、「持続可能な社会」という言葉は使わなくても、そのことが腹に落ちているように感じた。 ●若者たちが起こした変化:築羽(つくば)自治区で、笛の吹き手がいらないから郷社の祭りをやめようという話がお年寄りの中から出たが、若者たちは「いないなら、笛の練習をしよう」と練習会を開き、祭りは継続された。 ●今後の可能性:若者会でターンを呼び込むことができるように。また、ターンで入ってきた人と若い衆同士のつながりができるように。 			

<現在直面している課題>

課題があるから楽しい。何かやるときに、多様な人がつながって一緒にやればいい。お寺が本来、住職だけのものではなく、檀家のためや地域の人のために存在するように、同社もその感覚でやれるといいと思っている。

<今後やってみたいこと>

子どもができてから「教育費はどうするの?」とよく聞かれるが、教育まで外注するのかと思う。教育費のためにお金を稼ぐなら、その時間をいろいろなことを体験させたり、親の働く姿を見せたりする時間に充てたい。地域が学校になるような、地域の人が先生になるような仕掛けをつくりたい。
地域の中では、自分のライフステージと合わせて様々なことを変化させてやっていけば、自分が納得できる仕事ができる。今は小さな子どもたちが集う企画など。山里では死ぬまでやることがあると思う。

<そのためにはどんな情報・人脈が必要か>

<チームオリジナルの質問>

質問内容: 若者PJの他にも、豊森なりわい塾、スローライフセンター、木の駅プロジェクト、千年持続学校など、様々なPJが旭地区に集中する理由は何?

答え:

- 豊田市の中でも高齢化率は41%と、一番高い分、危機感がある。
- 旭地区には財産区や観光資源など、経済的基盤が弱い。国道もない。他の地域に比べて何もない分、お金とは関係ないコミュニティーが残っている。観光にも毒されず、人がいい。都会の人をつなげるにも、ここなら今までの観光のあり方とは違う、濃密に人と関わりながら気づきを得る新たな観光ができるのではないか。
- 地域をなんとかしたいという数人のキーマンが動いてきたことと、外部からのプロジェクトの刺激がいろいろ縁で重なりあって、人が人を呼ぶ動きになってきたということだと思う。捨てずにあきらめずに地道に行動し続ければ、いつかたちになる。

<その他、伝えたいこと>

○ターンで来る人に

一番大切なのは、自分が自分なりに生きていくこと。悩んでいる過程もとても大事。稼ぎに意識がいきがちだが、自分なりの暮らしをつくることを意識して役割を担い、その延長に稼ぎ仕事があると考え、心を平穏に保ちながら住み続けることができると思う。孤立しがちなので、お祭りやお役に積極的に出て、その場を楽しんで!

(写真: キャプションも入れる)

同社の事務所になっている福蔵寺にて



ビザ窯が地域のイベントなどで活躍

戸田さん宅で薪割り実演



矢作川流域山村再生担い手事例集 調査報告ノート

調査団体名	農業生産法人 みどりの里	団体代表者名	山中 勲
設立年	2008年	対応してくれた人の名前	野中 慎吾
団体URL	http://okome.boo-log.com/		
活動拠点	愛知県豊田市	調査員	後藤 伸也、蜂須賀 功
取材日	平成25年11月15日	レポート作成者	蜂須賀 功
<p><活動内容></p> <p>スーパーやまのぶの山中勲氏が社長から会長に就任する際に、安全安心な食品を提供したいという思いから、山中氏が退職金を投じて農業生産法人を立ち上げた。代表は山中氏で、社員は野中夫婦のほか2人おり、合計4人いる。</p> <p>農薬、肥料を使わずに主に米、いちご等を栽培し、スーパーやまのぶ梅坪店の「ごんべいの里」(添加物・科学肥料・農薬などのできるだけ少なく、又は使用しない商品)で主に販売している。</p> <p>一般のほとんどの農家では収穫量の増加、農作業の効率化、市場への規格適合のため、農薬や肥料を使っているが、みどりの里では無農薬、無肥料を通じ、作物の本来持っている生命力、おいしさを引き出し、人間の体によい農業を行っている。そのため、草取りや土壌管理などに苦勞するが、毎年試行錯誤を重ね、自然栽培の確立に取り組んでいる。</p>			
<p><会のモットー(何を大切にしているか)></p> <p>無農薬、無肥料を基本に、自然の力をそのまま引き出す農業の確立。</p> <p>現在の農業は収穫量を増やしたり、害虫が付かないよう、肥料や農薬を使っているが、食物側からすれば、その行為は「人が余計なことをしている」と言えるのではないか。食物は本来、自然のルール(摂理)で育つものである。特に、窒素を入れることにより、硝酸ができ、野菜を早く腐敗させる原因にもなり、味もまずくなる。無農薬、無肥料の農業は大変ではあるが、少量でも品質が高く、安全、安心な食物を提供している。</p>			
<p><設立から現在に至るまでに変化したこと></p> <p>当初は、スーパーで米等を販売していたが、最近は個人のお店に対しても宅配したり、無農薬・無肥料の食物が体に良いことから、患者の免疫力を高める総合医療の分野にも進出しつつある。</p>			
<p><連携している団体・専門家・自治体など></p> <ul style="list-style-type: none"> ・スーパーやまのぶ ・木村秋則氏(環境にやさしい循環型農業を目指す自然栽培を行い、無肥料・無農薬のお米・野菜作りに挑戦) 			
<p><山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動>例: 小仕事づくり、山村・森林資源活用など</p> <p>山村再生を目的として事業を行っているわけではないが、産業として継続的にやっていくこと(プロとして提供していくこと)が大切と考えている。それが結果的に中山間地の再生につながると思う。</p>			
<p><現在直面している課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・無農薬、無肥料の農業は、どうしても人件費が高くなり、採算をとるのが難しい。人を雇っても、年中仕事があるわけではなく、臨時的に人手が必要なときのみ、雇える仕組みがあるとよい。 ・やはり、草刈りが大変である。 ・天候に柔軟に対応するのが難しい。 			

<今後やってみたいこと>

一時的に人手が欲しい場合に、柔軟に人を雇えるようにしたい。試みとして、軽度の障がい者施設と協力して、草刈りなどをお願いしている。
また、農業を始めたきっかけがオイスカでの国際協力の経験であるため、いつかは農業の国際貢献ができればいいと思う。

<そのためにはどんな情報・人脈が必要か>

臨時的に障がい者を雇う場合、仕事の情報と人材の情報がマッチングするような仕組みが欲しい。また、障がい者を雇う際に補助金など行政からの支援がもっとあることが望ましい。

<チームオリジナルの質問>

質問内容:

中山間地でみどりの里のような自然栽培を中心とした農業を行うことができるかどうか。

答え:

物ごとには、「天・地・人」が揃っていないとなかなか進まないと思う。天はタイミングであり、地は土地である。したがって、自分のやっている自然栽培は、豊田市のような平野部でできることであり、これをそのまま山間地で行うことは無理だし、できないと思う。それよりも、山間地にあった農業があるのではないかと思う。例えば、養蜂、養鶏、家畜などが適していると思う。

<その他、伝えたいこと>

○自然栽培(無農薬、無肥料)で体に良いものを作り、食べてもらいたい。

- ・肥料(窒素)を入れる代わりに、根を大きくしたり、温度管理をして、自然の力すなわち食物本来持っている力で育てる。(腐敗のメカニズム)

肥料の投与 → 硝酸性窒素の発生 → モノの分解(腐敗)が促進

・人間は窒素を過剰にとると、アンモニア性窒素として排出できるが、植物はそれができないために、体内に取り入れ、それを落とすことで病気になってしまう。

・植物は本来光合成で空気からほとんどの養分をとっている。二酸化炭素と水で炭水化物を作っているが、窒素が入ることによりタンパク質ができ、炭水化物が分散され、炭水化物(糖、でんぷん)の薄いものができることになる。自然栽培を行うと、炭水化物がギュッとつまったおいしいものができる。

- ・品質が高く、腐りにくく、今までにないもの(全く別のもの)ができる。

・とてもおいしく、病害虫もつかず、品質も安定する。無農薬というだけで作りやすい。

(写真: キャプションも入れる)



いちごハウスでの野中さん

・矢作川流域圏森づくりガイドラインについて

森づくりWGの議論をはじめるとにあたって

2013. 12. 11

「森づくりWG」の議論をはじめるとにあたって

担当 蔵治光一郎

1. 「森づくりガイドライン」の中身を議論し始める前に、まずは流域圏の「森づくり」の実態をリストアップし、「矢作川流域の森づくり」と題する資料を作成したい。川部会、海部会、流域圏の住民が一目見て、矢作川流域圏の森の全体像が理解できる資料。

- > (1). ①現況図（地形図、植生図など）
- > ※ごくおおざっぱなもの（例：1kmメッシュ）
- > → 事務局補佐（建設技術研究所）
- > (2). ②地区別「岡崎、豊田、恵那、根羽、平谷」の森林の基礎データ
- > 森林面積、人工林面積、天然林等面積 → 洲崎さん
- > 過去5年間の間伐の、補助事業の種類別の実績 → 各市村
- > 行政が長期計画の目標としている森林型と、その面積 → 蔵治
- > (3). ③各地区でアピールしたい特色のある「流域圏の森づくり」の事例、
- > および、市境・県境を超えた連携による森づくりの事例
- > → 各県、各市村、それぞれ1事例ずつ
- > （フォーマットは現時点では特に定めません。1事例をA4、1枚で
- > お願いします）

矢作川流域圏における最近5年間の間伐面積の実績

矢作川流域圏における最近5年間の間伐面積の実績

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
岡崎市								
計				365.2	423.9	524.0	418.5	396.4
公共造林				152.0	104.4	190.0	45.2	43.1
治山				103.8	87.9	79.1	50.6	38.1
矢作川水源基金				89.1	109.3	98.8	121.7	128.3
青木川流域造林					2.6	1.0	0.9	1.8
県税					66.4	126.5	115.1	126.3
加速化					13.8	21.8	28.0	7.6
森林農地整備センター				13.5	19.7	1.4		8.6
県独自事業等							0.3	5.2
闇苅国有林					15.4		8.4	20.2
農林公社				6.8	4.3	5.5	48.5	17.2
豊田市								
計	1270.0	1351.0	1280.0	1276.0	1477.0	1403.0	1383.0	1112.0
保安林	347.0	346.0	421.0	319.0	234.0	228.0	167.0	83.0
農林公社	254.0	151.0	106.0	87.0	108.0	179.0	322.0	44.0
県税				5.0	205.0	416.0	436.0	506.0
県有林	43.0	47.0	14.0	26.0	23.0	42.0	46.0	32.0
市補助伐り置き	546.0	697.0	680.0	724.0	788.0	407.0	289.0	217.0
市補助巻き枯らし			3.0	5.0	3.0	1.0	2.0	2.0
市補助利用	80.0	100.0	48.0	104.0	82.0	109.0	97.0	137.0
山主自力		10.0	8.0	6.0	34.0	21.0	24.0	91.0
公共造林				431.0	455.0	270.8	113.3	
矢作川水源基金				197.0	218.0	156.9	163.2	
高齢級							4.1	
巻き枯らし				0.0	1.0	1.2	1.5	
水道水源保全基金				97.0	99.0	32.6	30.5	
市有林				108.0	100.0	55.9	75.2	
恵那市							1010.8	550.8
計							1010.8	550.8
造林補助金							291.6	306.6
条件不利							656.7	
県税								153.4
美しい森林							13.2	11.3
保安林							29.4	48.8
矢作川水源基金							14.3	13.1
その他							5.7	17.7

岡崎市域間伐実績

(ha)

	H20	H21	H22	H23	H24
公共造林事業 ※	152.01	104.43	190.00	45.17	43.12
治山事業 (本数調整伐)	103.77	87.88	79.10	50.57	38.13
水源林対策事業 (矢作川水源基金)	89.11	109.34	98.77	121.74	128.32
水源林対策事業 (青木川流域造林事業)	0.00	2.57	1.00	0.90	1.76
あいち森と緑づくり森林 整備事業(人工林)	-	66.43	126.46	115.08	126.29
森林整備加速化・林業再生事業	-	13.79	21.78	27.96	7.55
森林農地整備センター	13.48	19.72	1.39	0.00	8.6
その他(県独自事業など)				0.25	5.15
間伐国有林	-	15.38	0.00	8.40	20.2
農林公社	6.80	4.34	5.50	48.47	17.24
計	365.17	423.88	524.00	418.54	396.36

※岡崎市内の間伐実施面積集計であり、市有林等の区別はされていない。

1. はじめに

森林の洪水緩和や渇水緩和機能を巡って研究者が努力している間も、間伐されずに放置される人工林の面積は増加し続け、土砂崩れや水害などの自然災害も毎年のように発生してきた。間伐すべき時期が来ても人工林の間伐せずに過密状態のまま放置することは、自然災害や水枯れのリスクを高め、森林所有者の財産としての価値を損ねるだけでなく、下流域圏の住民の公益も損なわれるという認識が広く形成され、問題解決へ向けて行政、研究者、森林ボランティア、市民による様々な実践活動が全国のいたるところで行われるようになった。それらの活動の多くは、私的所有と公的支援の束縛という森林を巡る古典的なジレンマや、政策転換による制度変更、短期的な国民の価値観の変化に振り回され、挫折を繰り返しつつ成長していく途上にある。

蔵治・保屋野編（2004）は、高知県梶原村の事例を紹介しているが、ここでは愛知・岐阜・長野県を貫流する矢作川の「流域圏の森づくり」に向けた諸活動の成果と課題について、最近 10 年間の動きに焦点を当てて紹介する。矢作川流域の約 7 割は森林で、そのうち約半分はスギ・ヒノキ・カラマツの植林地（人工林）である。本節では矢作川流域圏内の地名がたくさん出てくるが、額田町を除き、図-1 に記載された名称を使用し、岡崎市に合併された額田町については旧額田町と記載する。

なお、10 年以上前から続いている矢作川流域圏の森を巡る諸活動については、すでに多くの出版物で紹介されている（銀河書房編（1994）、依光編（2001）、蔵治ら編（2006）など）ので、本節では概要のみを紹介する。



図—1 豊田市が2005年に広域合併した後、岡崎市が額田町と2006年に合併する前の矢作川流域図（蔵治ら、2006を一部改変）。

2. 矢作川流域圏の森と水と人の歴史

矢作川流域圏の森は、江戸時代末期には主に採草地として山焼きを繰り返す管理がされていたか、または薪炭林施業が行われていた。明治初期に入り、稲武地区では古橋源六郎暉兒氏ら、旧額田町では山本源吉氏らが主導し、スギやヒノキの植林が開始された。

矢作川流域に住み、矢作川の水を利用してきた人たちは昔から、森に降った雨や雪が集まった水を使っていることを認識し、森に感謝の気持ちを持っていた。1880年、全国の農業水路のさきがけとなる明治用水が開削され、1901年に明治用水頭首工が完成する。明治用水組合会（後の明治用水土地改良区）は、1902年に結成された矢作川漁業保護組合（後の矢作川漁業協同組合）組合長の鈴木茂樹氏の働きかけもあって、1908年から順次、下山地区、旭地区、根羽村、平谷村の森林、計525ヘクタールを購入した。2007年度からはこの森林の維持管理に充当するため「水源かん養林基金」を設立し、広く寄付を募っている。

高度経済成長期の矢作川では流域の開発に伴う濁水が問題となった。1969年に明治用水土地改良区が農・漁業団体に働きかけ、流城市町村も加わり、地域が一体となった水質保全のための組

織として矢作川沿岸水質保全対策協議会（矢水協）が設立された。さらに 1971 年には、地域開発に関する理論と開発方式の調査研究を行う組織として矢作川流域開発研究会（矢流研）が設立された。矢水協は実戦部隊、矢流研は矢水協の理論的支柱の役割を果たし、矢流研の会長であった伊藤郷平氏が提唱したと言われている言葉「流域は一つ、運命共同体」はやがて矢水協のローガンとなった（銀河書房編、1994、矢作川漁協 100 年史編集委員会、2003）。

矢作川本流には明治用水頭首工、中部電力が所有する水力発電ダム、国土交通省直轄の多目的ダムなど本流に 7 つのダムがある。ダム等の建設を促進し、水資源の開発と国土の保全に寄与することを目的として、1974 年に施行された水源地域対策特別措置法（水特法）の規定により、全国 8 基金の一つとして矢作川水源基金が 1978 年に設けられた。この基金は、流域圏の人工林の間伐補助金として今に至るまで効果的に使われている。8 基金のうち水源林対策を明記し、間伐の補助金を支出しているのは矢作川と豊川のみである。

明治用水の受益地域が多くを占める安城市は、根羽村との間で「矢作川水源の森」森林整備協定を結んだ。これは 1991 年から 30 年間の 48 ヘクタールの分収育林契約であり、森林整備協定の全国第一号であった。1993 年には豊田市水道事業審議会が「将来にわたり水道水が安全でおいしい水であるためには、水道水源の保全が必要である」と答申し、これを受けて 1994 年に水道使用者から使用量 1 トンあたり 1 円を上乗せ徴収して積み立てる豊田市水道水源保全基金が設けられた。この基金による人工林の間伐は 2000 年から始まっている。

旧額田町も 2004 年、使用量 1 トンあたり 1 円を上乗せ徴収して「ぬかたの源流の森づくり基金」を創設し、間伐作業等の直接的な森林整備事業、森林の役割についての啓発及び学習事業、ボランティアによる森林整備及び間伐材利用促進運動の支援事業、上下流域の交流促進事業に使っていた。しかし 2006 年に額田町が岡崎市と合併した際にこの基金は廃止されてしまった。

3. 矢作川流域森の健康診断

2000 年に矢作川流域圏は東海（恵南）豪雨に襲われ、沢筋が崩落して大量の土砂と根こそぎ倒れた木が川を流れ下り、矢作ダム貯水池に流れ込み、280 万立方メートル（約 15 年分）の土砂、3 万 5 千立方メートル（約 60 年分）の流木がひと雨で矢作ダム貯水池に流れ込んだ。この影響もあり、2004 年に矢作ダムの堆砂量は計画堆砂量を上回った（渡邊・田島、2008）。この災害をきっかけとして、矢作川上流域の森林が間伐されずに放置されている実態が明らかになっていった。

2004 年に矢作川水系森林ボランティア協議会が結成された。同年、豊田市矢作川研究所の洲崎燈子氏と蔵治が共同代表となって矢作川森の研究者グループ（矢森研）が結成され、矢森協と矢森研で森の健康診断実行委員会が組織された。実行委員会は「矢作川森の健康診断」を 2005 年から毎年 1 回実施し、2013 年の第 9 回までに参加者 2,069 人が 549 地点を調査した。調査地点は一辺 2 キロメートルの格子点で行い、第 4 回までに流域を 1 巡し、第 9 回までに 2 巡した（図 ー 2）。その結果、調査地点の 59 パーセントが胸高断面積合計 50 平方メートル／ヘクタール以上、50 パーセントが林分形状比 80 以上、72 パーセントが相対幹距 17 未満といった「過密人工林の基準」を超えており、過密人工林と診断された。「超過密」とされる相対幹距 14 未満の地点が 48 パーセントもあった。調査結果は森の健康診断ポータルサイトで公開されている。

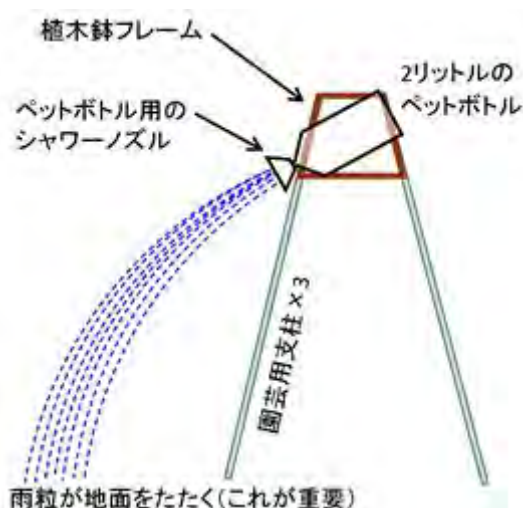


図—2 矢作川森の健康診断の調査地点（第9回矢作川森の健康診断実行委員会、2013）

矢作川森の健康診断の結果で特筆すべきことは、1巡目と2巡目の比較結果である。恵那市の串原、上矢作町、明智町の地域では2006～07年に1巡目の47地点、2012年に2巡目の42地点の健康診断を行った。その結果、平均植栽木密度は1679本/ヘクタールから1360本/ヘクタールに減少した一方で、胸高直径の中央値は19センチから23センチに増加した。草と低木の被覆率、種数の平均値はそれぞれ1.5倍、2.0倍に増加した。この地域では2006年から2012年にかけて間伐が進み、植栽木の本数密度が下がり、草と低木の被覆率や種数が増加し、「森が健康になった」ことが証明された（第8回矢作川森の健康診断実行委員会、2012）。この地域を管轄する恵南森林組合は、この期間に大胆な経営改革を断行し、私有林での間伐の事業量を大幅に増加させると同時に、自力での事業だけでなく民間事業者との連携による森づくりも推進しており（酒井、2012）、その努力が実って間伐面積が顕著に増加したことが、木材の生産量ではなく、間伐面積を評価する仕組みである森の健康診断の結果に現れたと考えられる。

2009年の第5回矢作川森の健康診断からは、オプション調査として「緑のダム実験」も開始さ

れた。これは簡易な人工降雨実験装置で、約 2 メートルの高さから、2 リットルのペットボトルに満たした水を、ボトルの先端に取り付けたシャワーノズルから地面に降らせる。ペットボトルは 3 本の園芸用支柱で支えた植木鉢用フレームに差し込んで固定する（図—3）。この装置は 100 円ショップで購入可能な物品のみを使って組み立てることができる利点があり、降雨の浸透能のデータを得ることはできないが、1) 豪雨の際に洪水を引き起こす原因となる表面流発生の有無、2) 散水地点の水の浸みこみ易さの指標となる散水停止時の散水域の水溜りの有無、3) 水溜りの水が地面に浸み込むまでの時間、などをおおまかに知ることができる（第 9 回森の健康診断実行委員会、2013）。



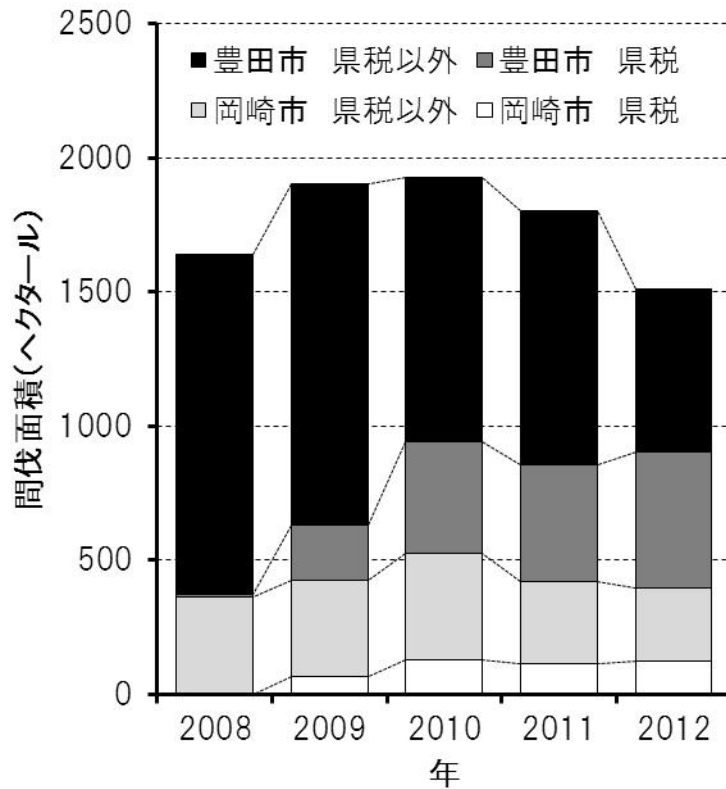
図—3 緑のダム実験の模式図（第 9 回矢作川森の健康診断実行委員会、2013）

4. 市町村合併と流域圏の森林

豊田市、岡崎市、恵那市はそれぞれ 2005 年、2006 年、2004 年に広域合併した。豊田市と岡崎市は市域のほぼ全域が矢作川流域内に含まれ、都市と水源の森とが一体化した自治体になった。恵那市は矢作川、庄内川、木曾川の 3 流域にまたがる市となり、根羽村、平谷村は合併しない道を選んだ。

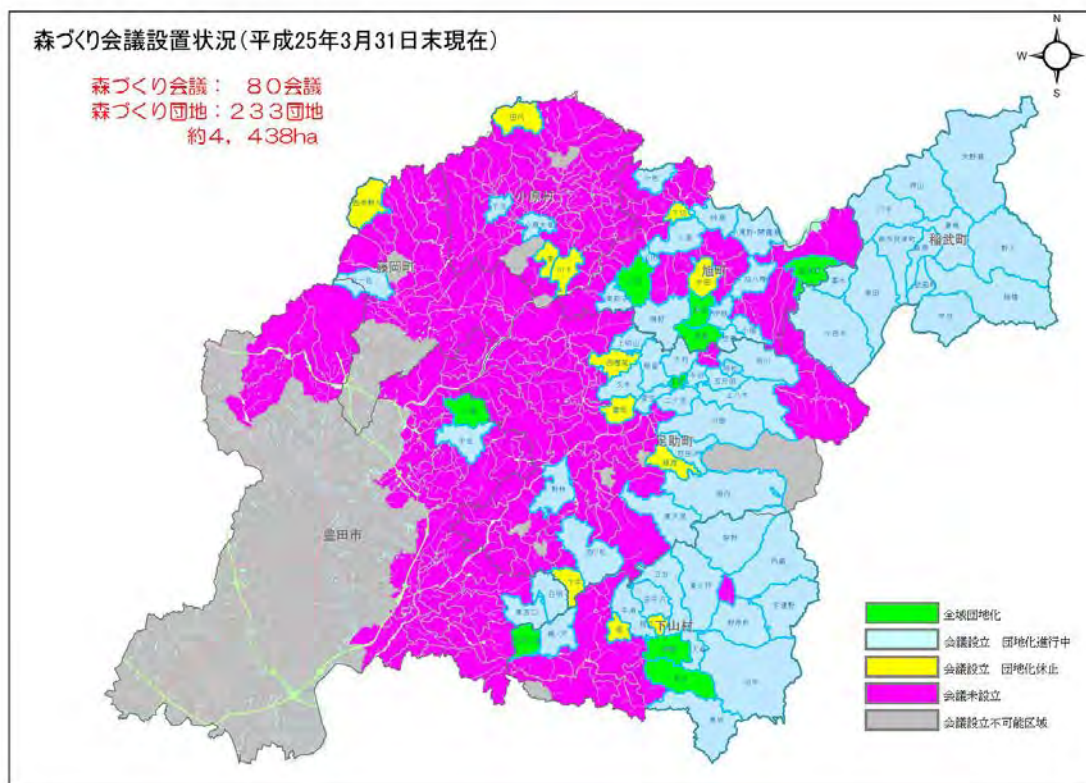
豊田市は 2007 年に「100 年の森づくり構想」「森づくり条例」「森づくり基本計画」を、恵那市は 2008 年に「えなの森林づくり基本計画」「えなの森林づくり実施計画」を、岡崎市は 2011 年に「森林整備ビジョン」を、それぞれ制定した。

愛知、岐阜、長野県はそれぞれ 2009 年度、2012 年度、2008 年度から「あいち森と緑づくり税」「清流の国ぎふ森林・環境税」「長野県森林づくり県民税」を導入した。しかし岡崎市や豊田市では、あいち森と緑づくり税による間伐面積が増えた一方で、他の補助事業等による間伐面積が国の政策転換の影響もあって減少した結果、全間伐面積は 2010 年をピークに減少傾向に転じた（図—4）。また神奈川県が行っているような水源地の他県に県税を支出する取り組みを愛知県は行っていない。県民の負担も愛知県、長野県が 500 円であるのに対して岐阜県は 1000 円であり、下流県よりも上流県の方が県民の負担が多くなってしまっている。



図—4 岡崎市と豊田市における間伐面積の推移

豊田市の森林施策の特徴は、「森づくり会議」と名付けられた集落ごとの森林自治を実現する組織である。森づくり会議の設立を推進したことによって、都市に近い森ほど、森づくり会議の設置が困難になるということが明らかとなった。その一番の原因は、大多数の森林所有者が無関心で、会議を主導できる適任者が見つからないことだった。都市に近い森ほど管理が行き届かなくなる「ドーナツ現象」とでも言うべき状況が出現している（図—5）。この状況を打開するための決め手となる施策は、矢作川流域圏ではまだ誰も示すことができていない。



図—5 豊田市森づくり会議設置状況（豊田市、2013）

また岡崎市では、前述した森の健康診断の1巡目と2巡目の結果を比較したところ、恵那市のような数値の改善はみられなかった。旧額田町で行われた結果報告会では、「材価が安いことが最大の問題であって、材価が上がれば問題は自動的に解決する」「行政はもっと材価を上げる努力をすべきだ」という意見が多く聞かれた。明治時代から100年以上、森林を主に木材生産の場として見てきた地域では、森林の木材生産以外の価値に光を当てることは容易ではなく、木材生産が活発になれば、公益的機能もおのずから発揮される、という非科学的な予定調和論がいまだに固く信じられている実態があらためて明らかになった。確かに材価が上昇すれば木材生産はある程度、活性化するかもしれないが、それは公益的機能を顧みない低コストで大規模な方式で行われる可能性がある。また、木材生産による利益を最大化するために皆伐した跡地に植林をせずに放置する者が後を絶たず、各地で問題となっている。

5. 流域圏一体化へ向けての新たな取り組み

国土交通省は、1997年に改正された河川法に基づき、2006年に矢作川河川整備基本方針を策定し、2009年には同省中部地方整備局が矢作川河川整備計画を策定した。これらの計画に基づき、2010年8月に河川管理者、行政、関係団体、市民が参加して矢作川流域圏懇談会が設立され、地域部会として山部会、川部会、海部会が設けられた。山部会では流域住民の主導で議論の出発点「矢作川の恵みで生きる」を共有し、山部会で扱う課題として「人と山村」「森林」、当面の解決方法として「山村再生担い手づくり事例集」「森づくりガイドライン」「木づかいガイドライン」

の策定を行うこととし、それぞれ行政、森林組合、研究者、森林ボランティア、住民によるワーキンググループを組織して毎月1回会議を行っている。

旧額田町や稲武地区と同様、古くから木材生産に重点を置いてきた根羽村では、皆伐後の植林にかかるコストを低減するための検討会を立ち上げたが、流域圏懇談会の設立を受けて、コスト低減と同時に矢作川流域圏に配慮した木材生産・植林方式を検討する必要があるとして、この検討会に流域圏懇談会のメンバーを加えて議論を開始した。流域圏懇談会に山部会が設けられ、関係者が集まり、議論を始めたことが、矢作川流域圏で森づくりに携わっている森林組合や行政を動かしつつあり、流域圏が一体となった森づくりへの機運が高まってきている。流域圏懇談会は9年間で1サイクルとして課題の解決手法を提案し、実践することを目標としており、今後の流域圏の森づくりをリードする役割も期待されている。

矢作川流域圏懇談会では、森づくりと並行して、木づかいガイドラインの議論も進めている。ここで木づかいとは土木や建築、木工の材料としての利用にとどまらず、エネルギー利用も含まれる。単なる木づかいであれば輸入材や、日本の他の地域で生産された木材との競争になるので、流域圏の木づかいは、流域圏材の木づかいとすることが望ましい。矢作川流域圏住民には、木材を購入する際、矢作川流域圏材を選んで購入することが、自らの安心、安全な暮らしにつながるというストーリーを理解し、流域圏材を積極的に選択して使うことが求められており、矢作川流域圏の木材生産関係者には、そのような意識に目覚めた流域圏住民が流域圏材を容易に購入できるようなウェブサイトの構築や、アンテナショップの創設、流域圏材の安定供給体制の構築などに、一体となって取り組めるかが問われている。

6. おわりに

矢作川におけるこれまでの森づくりへの最近10年間の取り組みについて概観した。

かつて矢作川の森づくりのキーワードは「植林」であった。しかし流域の山がほぼすべて森林で覆われ、時を同じくして木材価格が低迷し、木材生産が不活発になり、植林できる場所（皆伐跡地）がなくなってきたことに伴い、植林が必要な状況は終わった。

10年前から現在に至るまでのキーワードは「不健康人工林の間伐」だった。不健康人工林の実態が明らかになり、森林への関心の高い地域では間伐が劇的に進んだが、関心の低い地域では間伐が進んでいない。また木材生産を重視して間伐の伐倒木を搬出しようとする、同じ作業員の労力で間伐可能な面積がその分、減ってしまうこともわかってきた。

矢作川流域圏の森づくりの今後のキーワードは「流域圏の木づかい」となるかもしれないが、「不健康人工林の間伐」も、特に市街地に近い森や木材生産が困難な人工林では、大きな課題として残り続けるだろう。また今後は生物多様性やレクリエーション機能の発揮といった機能や、人工林だけでなく天然林についても目を向けていく必要がある。

引用文献

- 蔵治光一郎・洲崎燈子・丹羽健司（編）『森の健康診断－100円グッズで始める市民と研究者の愉快な森林調査』築地書館、2006年
- 銀河書房（編）『水源の森は都市の森』銀河書房、1994年

依光良三（編）『流域の環境保護』日本経済新聞社、2001年
矢作川漁協 100 年史編集委員会『環境漁協宣言 矢作川漁協 100 年史』風媒社、2003 年
酒井秀夫『林業生産技術ゼミナール 伐出・路網からサプライチェーンまで』全国林業改良普及協会、2012 年
第 8 回矢作川森の健康診断実行委員会「第 8 回矢作川森の健康診断 2012 概要版」、矢作川森の健康診断実行委員会、2012 年
第 9 回矢作川森の健康診断実行委員会「第 9 回矢作川森の健康診断 2013 概要版」、矢作川森の健康診断実行委員会、2013 年
豊田市「平成 25 年度第一回森づくり委員会資料 3 - 1」、2013 年
(<http://www.city.toyota.aichi.jp/shingikai/ag/39/2501siryou0301.pdf>)
渡邊守・田島健「ダムにおける堆砂対策の現状と課題—矢作ダムを事例として—」日本水産工学会秋季シンポジウム「ダムにおける堆砂対策の現状と課題」、1-4 頁、2008 年

・矢作川流域圏木づかいガイドラインについて

1. 平成 25 年度 木づかいガイドラインの活動総括について

2. 平成 26 年度 木づかいガイドラインの活動方針について

3. 川・海部会との連携手法について

・ブレインストーミングの結果による木づかい推進の考え方

・矢作川ディズ 木づかいガイドライン ライフステージアタック表(イメージ案)

木づかいガイドライン作成関連資料

1 平成 25 年度 木づかいガイドラインの活動総括について

- ① 行政・森林組合等森林・木材関係者を中心とした木づかい推進の検討は、市民目線から離れてしまい、一部の専門家集団による議論に特化されてしまう懸念が生じた
- ② また、こうした関係者のみによる課題検討の傾向を打破する意味においても、流域圏懇談会への市民参加があるのではないかと、との強い意見もあった
- ③ そこで山部会の参加者全員が森づくりを含めた木づかい推進に対する検討に参加し、参加者ひとり一人がどんなガイドラインが理想的なのか、その形を検討するため「皆を木の世界に誘うためのブレインストーミング」を実施した
- ④ このブレインストーミングの実施結果により、ほぼ参加者全員が自然・森・木に対する鮮やかな原体験を認識しており、その原体験が現在の自然志向に結びついているという、原体験効果の重要性が共通認識となった
- ⑤ 同時に、「知識を得る」ことよりか、もっと体感的なことや自然の持つ神秘性・美しさ・生命感を感じ取れるような感性が育まれる場面づくりの重要性が認識された
- ⑥ また、こうした原体験が青少年期に集中することから、木づかい推進にあたっては青少年期から森や木に触れ合う機会や場所を設けていくことの大切さが認識された
- ⑦ 青少年期から木づかい推進を進め、こうした場面や機会を矢作川流域全体に広げていくためには、まず市民目線から日常的に木づかい推進に結びつく行動・活動を考えてこれを核とし、その行動・活動を行政・業界・研究が支援していくような形が望ましいという結論となった
- ⑧ こうした考え・思想を流域住民に理解してもらうため、「人生を楽しみ愛する家族と共に幸せに暮らす 森や木とそれを育む矢作川の流れと共に生きるライフスタイルへの誘い 矢作川ディズ」としてまとめた
- ⑨ こうした取りまとめを踏まえ、赤ちゃんから始まるトータル的な各ライフステージにおいて、市民目線による木づかい推進を行う「矢作川ディズ 木づかいガイドライン ライフステージアタック表（イメージ案）」を作成した
- ⑩ アタック表の作成と森づくりガイドラインの検討を含め、これをより具体的に進めていくため、さらに広域的な県職員・市町村職員の参加を呼びかけた結果、山部会への参加者も増え、特に 3 県の林業普及指導員による統一的な情報の把握や、県の垣根を越えた活動や連携を期待している
- ⑪ 同時に、流域内で関連する方々の新たな拾い出しを呼びかけて、本年度の活動は終了している

2 平成 26 年度 木づかいガイドラインの活動方針について

- ① すでにアタック表に掲載できる既存の活動や、これから実践できる活動を加えたより現実的なアタック表とするため、既に木づかい推進に取り組まれている実績のあるスタッフや、関連するスタッフを新たに探して部会に参加してもらう
- ② 新スタッフを加え、平成 25 年度のライフステージアタック表（案）をベースに、すでに取り組まれている「とよた森林学校」等の活動を表に落とし込んでみることにより、広範囲の木づかい推進活動をアタック表の視点から見える化してみる
- ③ この時点で分析を行い、どの部分が充実していて、どの部分が弱いのか把握し、アタック表を再整理してみる
- ④ また、ここで明らかになった先進的な取り組みを数回、部会として体験してみる
- ⑤ この先進的な取り組みが他地区へも比較的簡単に導入することができれば、それをアタック表に加えて見える化する
- ⑥ これにより、現時点での木づかいガイドラインの原形を作成する
- ⑦ 核となる市民活動（提案されたものも含める）ごとにプロジェクトチームを結成し、行政・業界・研究者の上手な連携の形態を提案、あるいは構築できるように検討・働きかけを行い（どの程度までできるかは検討）ながらアタック表に掲載して、皆が現実的な取り組みとして行動できるように段階的に木づかいガイドラインの作成を進める

3 川・海部会との連携手法について

- ① 川・海部会の方と木づかい推進のテーマで検討する場が欲しい
- ② このため例えば、現在部会毎に開催している形態を、川・山部会とか海・山部会とかせいぜい 2 部会の参加に絞って合同部会を開催してみてもどうか。
- ③ また、その際には事前にこれを考えてきてほしい、という内容を相手に投げかけておいてから部会を開催したい
- ④ 現時点で木づかい等で提案するなら、次のとおりです
 - ア 川・海部会で考えられる木づかいとはどんなものがあるか
 - イ 川・海を親しむために、「木づかい」によってどんなことができるのか
 - ウ 川・海部会から山部会に求めるものとは何か
 - エ 山部会員は恐らく余り、川・海部会に参加していないと考えられるので、そのような人が始めて、川・海に問題意識を持つのに適した現地見学とは何か（上手に誘っていただければと思います）
 - オ 川・海部会の方が、山部会員に最低これだけは理解しておいて欲しいと望むものは何か

ブレインストーミングの結果による木づかい推進の考え方

- ①ブレインストーミングの結果、市民が主役となって生活の中で自然に木づかいを推進してもらうためには、市民のライフステージに合わせた取り組みが必要と考えられる。
- ②特に、年少の頃の自然との触れ合い等の原体験が、今後の自然観や森や木や水への関心度を高めることに対して、極めて重要であることが共通認識されているので、年少時からの木づかい推進の関わりを重視したい。
- ③矢作川流域ならではの森や木と水と共に人生を楽しむライフスタイルをまず、市民生活の中において意識化（矢作川ディズ）させ、産官学の連携によって、中でも森林づくりや木づかい推進を特に意図しながら進めていきたい。
- ④市民のライフステージをベースにして多岐に渡る木づかい推進項目を整理し、各項目ごとにフォーマットを決めて検討を進めることで、テーマの絞り込み・集中化・関連する関係者の招集・ワーキング活動がやりやすくなると考えられる。例えば、今回のテーマは、AーAー①という具合に。山部会での様々な木づかい推進アイデアを各ライフステージに盛り込んで形にしたい。
- ⑤推進項目のフォーマットが決定できれば、パターン化による電子媒体化・電子本・共通ホルダー化の作成も検討したい。場合によっては、市民からの情報収集も行いたい。
- ⑥市民が実践しているフリーペーパー「耕ライフ」誌のセンス・コンセプトを活かして、多岐に渡るテーマから順番にテーマを決めて、ポイント的に紹介して「矢作川ディズ」の見える化と推進を図りたい。
- ⑦推進項目やライフステージの区切りについては現行のイメージ（案）をベースに、ブレインストーミングにより整理したい。
- ⑧ガイドラインの作成を進めるにあたり、森づくり・木づかいの最前線の方々の参加によるワークショップを実践したい。その方々の現行の取り組みやワークショップの取り組みをライフステージアタック表に整理して組み込むだけでも、矢作川流域オリジナルとなるトータル的な木づかいガイドラインが作成できると考える。
- ⑨各県の林業普及指導員が参加してくれることにより、森づくり・木づかい推進の各県の共通項目による情報収集・人の輪づくり・行政提案・活動実践がやりやすくなると考えられる。各県の指導員の密な連絡・連携体制を期待したい。

矢作川ディズ 木づかいガイドライン ライフステージアタック表 (イメージ案)

矢作川ディズな ライフスタイル を確立するための ライフステージ アタック対象	ライフステージ の特徴	市民編A 森や木と水 と共に人生 を楽しむラ イフスタイ ル矢作川デ ィズへの誘 い さあ～しよ う	行政編B 木づかい推 進に向けた 社会環境・シ ステムづく りと矢作川 ディズへの 支援	業界編C 楽しい矢作 川ディズの 演出や木の 製品提供と そのことに よる持続可 能な地域産 業・生業の確 立	研究編D 木のすばらし さを伝えて木 づかいを進め、 森林や矢作川 の持つ役割の 大切を普及さ せる
ア 赤ちゃん～ 保育園の入園前 対象者数	人生のはじまり 木のぬくもり 三つ子の魂 100 までも	<ul style="list-style-type: none"> ① センス・オブ・ワ ンダーの 大切さを 理解しよ う ② 木のぬく もりで育 児をしよ う ③ 家族で自 然の息吹 を感じよ う ④ 安心して 野外で遊 ぼう ⑤ 記念植樹 をしよう ⑥ お母さん に読んで もらいた い本 	<ul style="list-style-type: none"> ① お父さん と母さん と赤ちゃ んのため の優しい 緑の散歩 道づくり ② お父さん とお母さ んと赤ち ゃんのため の優しい 緑の公園 づくり ③ 子供とお 父さんお かあさん が過ごし たい木と 緑に囲ま れた憩い の空間づ くり 	<ul style="list-style-type: none"> ① 子供の安 全な子育て に配慮し たベビー ベッド ② 安心して 使える木 の食器 ③ 木のおも ちゃの提 案 ④ お風呂に 浮かべる 木の玉プ レゼント ⑤ 小さな子 供さんに 配慮した 緑陰樹を 植える 	<ul style="list-style-type: none"> ① 幼児期にお ける木との 触れ合いが もたらす効 果 ② 幼児期にお ける緑の空 間もたら す効果
イ 保育園児	人生のはじまり 木のぬくもり	① 自然を感 じてみよ	① 木造保育 園の設置	① 木造保育 園モザイ	① 木造校舎が 児童に果た

対象者数	三つ子の魂 100 までも 五感の発達	う ② 木で遊ぼう ③ 木と森の物語を楽しもう ④ 子供と楽しもう	② 身の回りの木造製品の施設設置 ③ 窓辺を覆う緑のカーテンづくり	ク床パネル ② 保育園児のための積み木のプレゼント(針・広の樹種)	す様々な効果 ② 保育園児の好きな形・玩具の研究
ウ 小学校 対象者数	感受性の高まり 自我の芽生え センス・オブ・ワンダー 人間関係の構築 (仲間に対する信頼・友情等) 自分の力の認知	① 自然を五感で感じてみよう ② 自然観察をしてみよう ③ 君に教えるふるさとの木の四季の姿(マイツリーを見つけよう・植えよう) ④ 木の工作をしてみよう ⑤ 木の面白科学実験で木を好きになろう ⑥ ネイチャーゲームで楽しもう ⑦ 森の中で秘密基地	① 子供たちが入っても安全な学有林の設置 ② 先生のための木育指導ガイドブック(流域編) ③ 先生のための木育指導研修 ④ 先生のためのブックレビュー ⑤ 地元の木を使用した魅力的な校舎の建築 ⑥ 入学祝い・卒業記念になる机・椅子セットのプレゼ	① 児童と先生のための山仕度セット(地下足袋・鉋・鋸セット) ② 地元の木を使用した魅力的な校舎の建築 ③ 木のキットハウスの提案(木の工作室) ④ 木と木を結ぶスカイウォーカー・ワイヤー滑り・ツリーハウス ⑤ 児童のための丸太・木材プレゼン	① 自然との出会いがもたらす創造力・観察力・協調性の効果 ② 木造校舎が児童にもたらす情操効果 ③ 子供のための木の科学実験ガイドブック ④ 森の働きについての理解を高める教材づくり

		を作ろう ⑧ ボルダリングで岩を楽しもう ⑨ ツリークライミングで木を楽しもう ⑩ ツリーハウスを作ってみよう ⑪ こんな本を読んでもみよう ⑫ 木と森の物語を楽しもう ⑬ 川に行ってプラナリアを見つけよう	ント ⑦ 少年たちに向けた地域と結びついた水と木と森の物語の創作 ⑧ 小学校の授業に山の授業を導入 ⑨ 地下足袋を揃える	ト ⑥ 端材を活用した教材キットの開発	
エ 中学校 対象者数	思春期	① 木の名前と特徴を知ろう ② 仲間と海から水源（逆も可）を目指す流域の旅に出かけよう ③ 流域の面白い場所を見つけよう ④ 自然の中	① 森と木に親しむ中学生のためのチャレンジ読本の創刊 ② 森と木に親しむ技能ブックの紹介 ③ 大工と建てる木の家と内装 ④ 森と川と共に生き	① 児童と先生のための山仕度セット（地下足袋・鉋・鋸セット） ② 地元の木を使用した魅力的な木造小学校の建築 ③ 木のキッ	

		<p>でチャレンジしてみよう</p> <p>⑤ こんな本を読んでみよう</p> <p>⑥ 山づくりのプロの技を見よう</p>	<p>た人々を学ぶ</p>	<p>トハウスの提案 (木の工作室)</p> <p>④ 木と木を結ぶスカイウォーカー・ワイヤー滑り</p> <p>⑤ 児童のための丸太・木材プレゼント</p>	
<p>オ 高等学校 対象者数</p>	<p>人生の選択</p>	<p>① 矢作川流域圏懇談会の調査に参加してみよう</p> <p>② 身近な里山を活用するプランづくりをしてみよう</p>	<p>① 緑と川と共に生きていくライフスタイルの提案</p> <p>② 木と緑と川の最前線で働く卒業生に今の職業を聴く</p> <p>③ 地域づくりを目指す若者のためのふるさとの自然を教える行政主導のガイダンス</p>	<p>① 私達の木と緑の職業案内</p> <p>② 地域を活かした地域産業ガイダンス</p>	<p>① 木と緑と川のための新たな研究者を求めよう</p>
<p>カ 大学</p>	<p>自我の確立</p>	<p>① 森や木や流域に対</p>	<p>① 学生の研究や起業</p>	<p>① 各県の林業研究機</p>	<p>② キャンパス内の木質</p>

<p>専門学校 対象者数</p>		<p>するテーマを見つけてみよう ② 地域社会の改革にチャレンジしてみよう ③ 遊休農地・里山活用にチャレンジしてみよう ④ 地域で活躍している人たちに会いにいこう ⑤ マイチェンソーを持ちましよう</p>	<p>チャレンジのため のフィールド提供</p>	<p>関と連携した木質化推進テーマ研究</p>	<p>化・都市部等の木質化に関する研究 ③ 水源地域での大学演習林設置による市民に向けた森林学習</p>
<p>キ 就職 対象者数</p>	<p>社会人</p>	<p>① 自分の職場環境で木づかいを進めてみよう ②</p>	<p>① 就職記念の木のフィールド提供 ② 企業による毎年恒例記念植樹・緑の回廊づくりの場の提供</p>	<p>① 木と共に暮らす様々なアイテム</p>	
<p>ク 市民・社会人 対象者数</p>	<p>ライフスタイルの確立</p>	<p>① 地元の木で家を建てよう</p>	<p>① 市民や公共施設の木づかい</p>	<p>① 地元の建築士・工務店によ</p>	<p>① 木の住まいの魅力を伝える様々な</p>

	<p>② 木のお店へ出かけてみよう</p> <p>③ 木の木陰を見つけて散歩やサイクリングをしよう</p> <p>④ 森や源流を訪ねて四季を楽しもう</p> <p>⑤ 暮らしやすく魅力的な自然環境をつくろう</p> <p>⑥ 身近な里山で母樹を見つけよう</p> <p>⑦ 地域材住宅の見学会に出かけよう</p> <p>⑧ 木の住まいを考えるにはこんな本を読んでもみよう</p> <p>⑨ 里山の哲学と知的財産に会いに行こう</p>	<p>を推進する様々な制度と支援策</p> <p>② 木づかいを推進するための業界と研究機関との連携やシステムづくり</p> <p>③ 木づかいによる公共空間づくり市民活動スギダラ ヒノダラ 広ダラ 矢作川の実践</p> <p>④ 木と森と田舎との出会いバスツアー 交通費支援</p> <p>⑤ 田舎の親戚制度で田舎を持つ</p> <p>⑥ 木材のパイロット価格制度導入による木材の安定供給</p>	<p>る様々な木の住まい提案</p> <p>② 様々な木の製品を扱うお店からの住まい提案</p> <p>③ 各社の快適住まい最新提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 断熱 ・ 結露 ・ 防水 ・ 温度・湿度調整 ・ 防音 <p>④ 広葉樹の利用編</p> <p>⑤ 径級別建築部材確保による建築部材の共通化</p> <p>⑥ 木材利用ポイント制度の普及</p>	<p>科学的データ</p> <p>② ウッドマイレージの考え方による国産材の普及</p> <p>③ 木造公共施設の低コスト建築方法</p>
--	--	---	--	---

結婚 対象者数	旅たち	<ul style="list-style-type: none"> ① 記念樹を植えて木と共に生きよう ② 木の住まいを検討してみよう ③ ライフプランを考えよう ④ 素敵な木の教会での挙式 ⑤ 森に祝福される日 	<ul style="list-style-type: none"> ① 木づかいによる結婚式の素敵な演出・支援措置 ② 結婚記念林の設定 	<ul style="list-style-type: none"> ① 木の結婚記念品の開発 	
出産 対象者数	家族			<ul style="list-style-type: none"> ① 木の出産記念品の開発 	
マイホーム 対象者数	家族の和生活拠点				
増改築 対象者数	住まいの補修	<ul style="list-style-type: none"> ① 現在の住まいを木造にしてみよう ② 室内の内装に木を使ってみよう 	<ul style="list-style-type: none"> ① 木づかい推進のための増改築支援 		
セカンドハウス 対象者数		<ul style="list-style-type: none"> ① 仲間と集まる家を建てよう ② 里山サロンを作ってみよう ③ 遊休農地でクリエ 	<ul style="list-style-type: none"> ① 市民による木づかい推進・地域づくりのための活動拠点施設支援 	<ul style="list-style-type: none"> ① 小さく住まう住宅提案 	

		イティブ な農業に チャレンジ	② 遊休農地 活用と結 び付けた 里山活動 拠点施設 ③ 田舎の親 戚制度の 創設		
市民・社会活動 対象者数	森づくり・木づ かいを通しての 人生の楽しみ	① 皆が集ま る公共空 間を木と 緑の憩い の空間に 変える ② 木づかい や流域を 愛する気 持ちをつ なげ絆を 高める矢 作川ディ ズ 駅 伝 (海から 水源 (1 日目、水 源から海 2 日目水 源 から 海) をや ってみよ う ③ スギダ ラ・ヒノ ダラ・広 ダラ矢作 川運動の 推進			① 森の健康 診断の結 果報告 ② 木づかい 推進によ る持続可 能な地域 づくりは 可能なの か
人生の達人	後世にスピリッ	① 森づくり	① 地域文化	② 技能・文	① 偉人達の足

対象者数	トを伝える 後世に技術・技 能を伝える	やその歴 史を語ろ う ② 自慢の我 が家を紹 介しよう ③ 森や木や 矢作川の 流れと共 に暮らし た 良 き 日々を語 ろう ④ 人生の達 人者のお 話を傾聴 しよう	の発信施 設	化の継承 ③ 達人が伝 えたい 森・木づ かいの場	跡を後世に わかりやす く伝える
------	---------------------------	---	-----------	---------------------------------------	------------------------